マザー・テレサの言葉

イエス様が、わたしたちを愛してくださったように、互いに愛し合いなさい。イエス様は、わたしたちのために、命を捧げて下さいました。

ですから、わたしたちも、自分にとっていちばんたいせつなものを差し出さなければなりません。

カトリック高松教区報

２０１７年１１月５日（第１８１号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

「ルター宗教改革５００年」巡礼に参加して

今年は、ルターの95箇条の提題提示から、５００年目に当たります。ルターがカトリック教会と袂を分かった１５００年代の歴史上宗教改革と呼ばれている分裂状況から、ルーテル教会とカトリック教会は50年の年月をかけて対話を続けてきました。

２０１３年には「争いから交わりへ」の一致に関する文章を掲げ、今までは対立点を強調してきた両教会が、一致への思いを込めて動き始めています。

日本でも今年11月23日に長崎のカトリック浦上教会で、両教会の合同の記念式典が計画されています。

そのような状況の中で、私は日本で唯一の（日本聖書協会の渡部総主事による）エキュメニカルな常設機関、神戸バイブルハウス主催の巡礼に参加できたことは幸いでした。

ルターの受洗教会

ルーテル教会で長らくルーテルアワーに携わってこられた有木牧師を団長に、20名の巡礼団で、ルターゆかりの地を巡礼してきました。

巡礼の道筋は、前半は当時の庶民の信仰心と大司教などのあり方を、感じるドイツの旅でした。

ルターの生きた時代・場所を歩く
ユダヤ人迫害にも利用された

〈95箇条のゆかりの地〉

彫刻師リーメンシュナイダーの「心を抉る祭壇・聖血祭壇と聖母マリアの祭壇」を訪れ、その後、95箇条の提題の送り先（ヴィッテンブルグの城教会に貼り出したというのは、現在疑問視されている）、マインツの大司教のカテドラルであるマインツ大聖堂、カール大帝などの帝国の聖堂といわれるアーヘンの大聖堂、ゴシック建設として最大のケルン大聖堂、そしてケルンの大司教の宮殿アウグスブルグ城、等を訪れ、豪華絢爛な建物を巡りながらカトリック教会側の大切にしているものを味わうというものでした。

ルターの受洗教会内部・中央は受洗盤

後半はその教会に対して、ルターの歩みを、４つのルターの町といわれる、ルターの生まれ亡くなった町アイスレーベン、ラテン学校に通ったアイゼナハ（ここはバッハの町でもあり、テレマンの勤めた町でもあります）、ルターの学んだ大学やルターが入った修道院がある町エアフルト、そしてルターが教えた大学のあるヴィッテンブルグを訪れました。

また、ツヴィングリなどとの協議の場所といわれるマールブルグ、身の危険から匿われ聖書をドイツ語に翻訳したヴァルトブルグ城なども訪れました。

その他、人々の生活を現す指ぬき博物館、ライン下り、ドイツではここしかないといわれるユダヤ人の迫害を心に留めたシャガールのステンドグラスがある聖シュテファン教会、ベルリンの壁の跡、ホロコースト慰霊碑、戦争の傷跡を残したカイザー・ヴィルヘルム教会、ポツダム会議の会場ツェツィーリエンホーフ宮殿なども訪れ、ルター時代だけではない争いから一致への希望の場を見ることが出来ました。

シュテファン教会

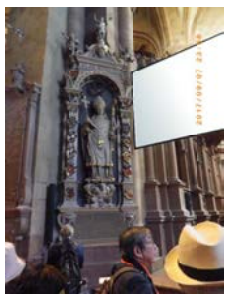
カトリックの聖週間の典礼は、４世紀末エルサレムを訪れたエジェリア修道女がその時その場で見た、エルサレムの典礼の影響があると言われています。

同じようにルターの生きたその場を訪れると、不思議とルターの人柄が伝わってくるようです。それと同時に、ルターは伝統を大切にし、ゆっくりとした変化を求めた事が、有木団長の解説一つ一つにしみ出ていました。

〈贖罪符にまつわる話〉

例えば、ルーテル教会の典礼はカトリックに似ていること、聖人聖女を大切にしていること、暴力を嫌っていたことなどを、肌で感じた時でもありました。

また、マインツの大聖堂では、贖罪符に関して、当時のアルブレヒト・フォン・ブランデンブルグ大司教の肖像の首に２つのパリウム（教皇と大司教の権威のしるしの首飾り）が掛かっているのを見ました。


アルブレヒト大司教像

ガイドさんは「普通は、パリウムは一つなのですが、この大司教は、もう一つ欲したため、例外を作ろうと、サン・ピエトロの補修のためのお金を出し、２つめのパリウム（大司教の位）を手に入れました」と、説明されました。そのお金のとばっちりが、贖罪符の販売となっていったということです。

罪の赦しは神からですが、その償いの一つの方法として教会財政に援助するという習わしがありました。

ところがこの贖罪符の販売を一手に引き受けた修道者が、「金貨がチャリンと鳴ると魂が一つ天に昇る」などと言って、自動販売機化させたわけです。

当時のスペインの大司教が、贖罪符の販売を断ったという話を聞くにつれ、個人的な欲が歴史を変えていく姿をそこに見る思いになりました。

マールブルグやヴァルトブルグ城では、わたしたち日本でハンガリーのエリザベト（ドイツではチューリンゲンのエリザベトといわれています）といわれる聖人がとても敬われていることにびっくりしました。

〈聖エリザベトを尊敬〉

貧しい人にパンを持って行こうとするとき、ご主人の王様に見つかり、籠の中に何を隠しているのですかと尋ねられて、バラの花を持っていますと嘘を言ったところ、中を見せてくださいと頼まれ、仕方なく籠の中を見せるとパンがバラに変わっていたという奇跡が、紹介されていました。

教会を支えるエリザベト像

このエリザベトの聖堂がマールブルグの山の下にあります。ドイツ騎士団が建てたもので、ケルンの大聖堂のモデルになったと言われ、ドイツ最古のゴシック建設の一つといわれています。

なぜドイツ騎士団が聖堂を、と思っていたところ、ドイツにはテンプル騎士団（ダビンチコードに出てきます）、聖ヨハネ騎士団、そしてドイツ騎士団という３大騎士団修道会（エルサレム巡礼の護衛から、騎士の役目も担うことになった修道会）があります。

このドイツ騎士団の団長であったエリザベトの義兄弟がローマ教皇から破門を受けたため、彼自身その赦しのための教会奉仕の一つの産物として、エリザベトの聖堂を建てたことが判り、遠い騎士団ということばが私にとっても、身近なものとなりました。

〈大司教は城持ち城主〉

また「なぜ大司教が、豪華なお城を持っているのですか」、こう質問された カトリックの信者の方もいました。それには「昔は大司教は司教であるのと同時に、領主だったのです」と説明がありました。

大司教も修道院長もその領地から得られる禄を財産としていた時代があったとのことでした。

その財産収入が目的化され、司教も修道院長も領地不在のことが多く、そのために教会や修道院の質が落ちてしまい、人々が憂慮していた状況であったことが、ルターの時代の社会状況だったわけです。

また一つ、私にとって大きな気づきがありました。ローテンブルグのヤコブ教会で、リーメンシュナイダーの「聖血の祭壇」を見学したときです。

ヤコブ教会を見るなり、母とおとずれた10年前のツアーを思い出しました。ところが、聖血の祭壇には覚えがないのです。

その折のローテンブルグに関しての私にとって一番印象的に残っていたものは、中世犯罪博物館だったのです。その時は、ルーテルの教会ということで、聖堂の中味もさらっと見学したのだなあと、思い出しました、

しかし今回はルターというテーマに基づいてじっくりと見たことで、視点の違いによって、見え方が全く違うということを経験したというわけです。

ルターの生家

今回、ルターとは関わりないと思っていた、ドイツにおけるユダヤ人迫害についてもまた、私に糸が紡がれた思いです。

宗教改革によって明らかにされたイエス・キリストの福音を、ユダヤ人がなぜ信じないのかと批判するルターの口調が、４００年を経てのち、ナチスによって利用されてしまいました。

〈青の中で一致を祈る〉

聖シュテファン教会での礼拝の時、あるいはカイザー・ヴィルヘルム教会の隣にある新教会での礼拝の時、どちらもその空間が青に映る空気の中で、その青は戦争が人々の幸せを剥奪する非人間性を指し示し、また一致へと向かわせる本質であるようにと深く祈りました。

「糸を紡ぐこと」、それは自分が経験したことと、歴史的な場に佇むことが、私と現実とをつなぐ体験として織りなされる巡礼の醍醐味だったのかもしれません。

桜町教会担当司祭
松浦信行

【子供と女性をまもる委員会】
カトリック中央協議会
聖職者による性的虐待があれば
直ちに「教区対応チーム」
（責任者・教区司教）に連絡ください。
連絡先　087-831-6659

はばたき

「人間がこんなに哀しいのに／主よ／海があまりにも碧いのです」長崎の遠藤周作文学館の「沈黙の碑」に刻まれている句です。

昔、彼の小説を読んだ時もこの言葉にひどく心が揺さぶられたのを思い出します。信仰の旅路において、人々は穏やかな生活を望んでいるにもかかわらず、世界を見渡しても、身辺にも、いさかい、争いがあり、困難や苦しみ悲しみは絶えることがありません。

八木重吉の詩に、「すべての／くるしみのこんげんは／むじょうけんに／むせいげんに／ひとをゆるすという／そのいちねんがきえうせたことだ」とあります。

シラ書には「隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願い求めるとき、お前の罪は赦される。自分の最後に心を致し、敵意を捨てよ、滅びゆく定めと死とを思い、掟を守れ」とあります。

自分は死にゆく有限の存在だと悟り、こぶしを振り上げたりしないで、すべては過ぎ去ると考えて大観しなさいと言っています。

今月は死者の月です。死者は常に自分の人生を見つめ直すようにと問いかけてくれています。感謝をこめて彼らのために祈りましょう。

また今月は、教区民の集いが各地区で行われます。社会のニードに向けて教会が提供できることを考える「福音マーケット」が行われます。

「社会とともに歩む教会に向けて」司教様とともに手をたずさえて歩んで参りましょう。

ヨゼフ新司祭の家訪問

ヨゼフ神父のふるさとを訪ねて　3

ー教区事務局長　西川康廣ー

子息捧げたご両親に心から感謝

いよいよヨゼフ神父の実家へと車を走らせた。わたしは疲れからかすっかり眠りに入り、到着まで天国にいた。到着ですという声に、一瞬「ここは一体どこ?」と声を掛けたが返事はなかった。

案内されるままに家屋に入り、家人と平凡な挨拶を交わしていた。ヨゼフ神父が現れたので、わたしは彼に「ここはどこ」と再度尋ねると、「我が家です」と返事あった。

居合わせた二人の老夫婦に誰であるかも分らないまま話を掛けていたが、まったく英語も通じなく躊躇していたところだった。

わたしは更に彼に尋ねた。「この方々はどなた」と。すると「両親です」と答えが返ってきたのでびっくりした。これがベトナムでの3番目のハプニングだった。

ご両親にお会いできて本当に嬉しかった。私が正式に改まった姿勢を取ると、ご両人も背筋を真っ直ぐにして、やや緊張気味に私の一つ一つの言葉にうなずきながら耳を傾けておられた。

私は徐々に言葉を切り出した。文化も言葉も、食べ物も習慣もすべてが異なる遠い日本の高松教区のために、大事な息子さんを捧げていただき教区を代表して心から感謝の意をお伝えした。

そしてご両親の手をしっかり握りしめ、高松教区はヨゼフ神父を大事しますと約束すると、ご両親は目に涙を浮かべて次のように言われた。「息子が司祭になりたいと言った時、勿論私たちは息子の気持ちを尊重し、いつでも神様にお捧げする用意はできていた。

ヨゼフ師実家の前で、ご両親（前列右お二人）とご親族

しかし息子が日本で宣教したいと言った時、そのことを耳にした妻は3日間寝込んでしまいました。ベトナムで働いてほしかったのです。

でもあの時の悲しみの涙は、今こうして遠い日本からわざわざベトナムへ駆けつけていただき、更に温かい言葉を頂戴し、わたしたちの悲しみの涙は喜びの涙に変わりました」と。

家族のみならず、どれほどヨゼフ神父が村人たちからも愛されているか肌で感じることができた。彼の家に滞在した2日間、道路に面して解放されたリビングルームにおいては、ヨゼフ神父の司祭叙階式、そしてベトナムでの初ミサの様子が、一日中繰り返し、繰り返し放映されていた。

村人たちが入れ代わり立ち代わり中に入り、そのDVDを鑑賞していた。村人たちは、ベトナムのお茶（ハブ茶）をすすりながら喜びを分かち合っていた。

聞くところによると、ベトナムにおけるキリスト教の宣教はこの地から始まり、ベトナム全土に広まったとのことである。

私たちは既に日曜日のミサは終えていたが、村の中の一つの大きな小教区を訪ね、小教区のミサに参加することにした。

当日は堂内ミサではなく、教会の広大な敷地いっぱい埋め尽くした野外でのミサだった。また聖母月でもあり、ミサ入祭時は小教区の楽団があって、様々な吹奏楽器、弦楽器、打楽器等々を元気よく演奏し、色とりどりの幟を従え、長い行列をなして元気よく入祭した。

楽団に続き侍者団、司祭団、そして司教の前にわたしも立ち、司教とともの入祭となりました。約60～70名の司祭たちがいたと思われるが、英語ができる司祭たちは英語で、日本の国と教会について、或いはベトナムの教会の印象などについて質問して来た。

あれほど荘厳で賑やかな演奏の中で、まるでオリンピックの入場式のような雰囲気でのミサ入祭は初めての経験だった。

更に夕方は夕方でヨゼフ神父の家から歩いて5分位のところに小教区があり、そこで、日本で言えば「子どもとともに捧げるミサ」があるとのことで参加した。

約1500～1600人が入る聖堂で、堂内は600～700名の子供たち、そして大人たちや楽団で埋め尽くされていた。大きな声で受け答えする子供たちの声や歌声に心からの感動を覚えた。

ミサの終わりにわたしは日本語で子供たちに少しだけ日本の教会を紹介し、ヨゼフ神父がベトナム語で通訳してくれた。

一つ一つの言葉に、子供たちが大きな拍手を送ってくれたことは大変嬉しかった。

ミサ後主任司祭と一緒に、果物をいただきながら暫し談笑の時間を共にした。

信徒会館には、その村から誕生した歴代の司祭や司教の写真が順番に並び、2017年3月に目を向けると我がヨゼフ新司祭の写真が飾られていた。

一言付け加えると、写真はこの教会だけではなく、村中の小教区や修道院において、幅2メートル高さ1メートル位の額縁に、ヨゼフ新司祭の叙階式・初ミサ時の写真が飾られていたのには驚きだった。

翌日がヨゼフ神父の甥子の結婚式とあって、この日の晩は前夜祭、これまた村中の人々が一堂に会し、食事とカラオケに興じていた。

わたしも招かれ、カラオケで都はるみの『夫婦坂』を披露した。拍手大喝采だった。その後近所の家に招かれ、これまたお茶を飲みながら暫し談笑した。

ベトナム滞在最終日の朝、わたしたちはご老人たちのお世話をされている「お告げの修道会」で朝6時にミサを捧げた。

当日のミサ説教は私が担当し、ヨゼフ神父が通訳をした。初めて日本語の説教を聞いた修道女をはじめ参列者は、こぞって日本語の響きに感動し、わたしが日本人であることを忘れて、ベトナム語で気軽に話しかけて来られる始末だった。

車椅子で移動する大勢のご老人が祝福を求めて私に近づかれ、神の祝福に満されて喜びの内にホームへお帰りになった。

その後、シスター方と一緒に朝食をご馳走になり、行く先々で出されるゆで卵（バルーッゥという孵化寸前の卵）はどうしても口へ運ぶことが出来ず、申し訳なかったと反省。

因みに、ベトナムの平日の朝ミサは4時、5時、6時と続き、このミサで奉仕してくれた侍者たちに、「早朝からご苦労様」と声を掛けると、次の返事が返ってきた。「わたしたちは、このミサ2つ目です」と。この言葉には頭が下がった。

午後からは結婚式を終えた新郎新婦を迎えての披露宴、あっちこっちから格式高い方々が招待されて一緒に食事をしながら、新しい夫婦の門出をお祝いすることができた。

社会の糧となりますよう

松山で教区女性の会

「福音マーケット」で宣教考える

9月2日、松山教会において第9回女性の会・愛媛大会が開催された。開会に当たり「高松教区女性の会」と、名称が新しくなったこと、そして、女性の豊かな力をこれからも生かしていきましょうとの日向郁子会長の呼びかけから始まりました。

諏訪司教様からは、今回のテーマ「社会と共に歩む教会に向けて・福音マーケット」になった経緯の説明がありました。

信仰年より学び得たことが、現代社会の人々とどうつながり、イエス様のこころを共に生きていくのかとの課題が生まれ、教会がマーケットとなり、社会の人々の糧となれるよう福音を売り出す、そのたたき台として福音マーケットを体験することになりました。

講師は六甲教会、吉村信夫氏が務められ、福音マーケットの共同作業「教会の現状と今後のあり方をさぐる」について説明してくださいました。

90人ほどの参加者は、10のグループに分かれ、机を囲み、各自に10枚ほど配られた紙片に、問いについて一枚の紙にひとつのことを短文で記入し、出し合います。

問一は、誰々が困っていること、助けを必要としていることは何か。問二は、教会・私たちは何を分かち合えるか、人々に喜んでもらえることは何かを思いつくままに、何枚も書きます。

講師の吉村氏から熱心に説明を聴く参加者

出し合った紙片を問ごとに二枚の模造紙上で内容毎に分類し、見出しをつけて貼っていきます。

昼食後、再び聖堂にて午前に行った作業結果を各グループが発表しました。

三枚の模造紙に、その豊かな内容が記されていましたが、問二の紙片が少し少なめに感じられました。

吉村氏は、皆が参加していろんな意見が出るのは、色々な人々がいるからで、それによって共同体はより豊かになると話されました。

イエス様はいろいろな人に出会われたが、プレッシャーに負けず、自由にご自分の使命を果たされたと、福音から学ぶこと教えられました。

一緒にやることの良さ、一緒にやれば出来ること、そして男性からは、「社会は教会をどう見ているか」、「具体的にどうしていくか、女性の力に期待します」との声もいただきました。

司教様は、開店は準備万端でなくても、工夫しながら前向きに進めて行き、何度もするうちに見えてくるとの助言をくださいました。

今回も司教様の美しい歌声とギターのリードで、テゼの祈りをささげ、聖フランシスコの平和の祈りを歌って会を終えました。

鳴門教会
三原千栄子

金祝・銀祝・米寿 おめでとうございます！！

金祝　Sr. 松本尚史、銀祝　Sr. 沖野弥生、Sr. 山名静子
米寿　Sr. 岡林満尾、Sr. 中村加代子、Sr. 森脇シズエ

中央：Sr. 松本尚史

生かされて

Sr・松本尚史

「コリント書を読んで、パウロは自分の受けた使命、自分の使徒職をどのように理解したかを自分の中で、まとめてください」とあり、読み返していましたら、懐かしい「みことば」が飛び込んできました。

若くして入会した私に、老いた両親に代わり姉達が「熊蔵じいさんからの贈り物」を届けに来てくれていました。

同級生と西尾神父様との面会時、「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です」「ユダヤ人には、つまずかせるもの、異邦人には、愚かなものですが・・」と話され、道のずーと向こうまで照らしていただいたようで、とても励まされました。

先日、私は修道誓願五十周年を盛大に祝っていただきました。改めて神さまと修道会の恵みと憐れみに感謝するとともに、出会うことができたすべての皆様に心より御礼申し上げます。

私は今、聖マルチン病院での使命に従っていますが、現在、介護保険制度は「経済財政運営と改革の基本方針2017」の施策の中にあります。

現場では、2名の神父様の訪問と各専門職員がイエスの福音の精神でご利用者に優しく寄り添い介護をしています。

私たち、医療機関における福音宣教活動が職員にも利用者にも「マルチン病院での関わりと出会いでよかった」と喜んでいただけるよう努めてまいりたいと思います。

（聖ドミニコ宣教修道女会員）

司祭紹介

東讃ブロック　番町教会担当司祭

松永洋司師

平戸の小学校を卒業し神学校へ

まずは、司祭叙階５０周年を迎えられましたことをお祝い申し上げます。この５０年の司祭生活を振り返って、何か感慨深いものをお持ちと思いますが、このお話の中でお聞きして行きたいと思います。

＊さて、初めに松永神父様の幼少のころのお話を伺いたいと思います。

わたしの里は、フランシスコ・ザビエルが日本宣教に取り掛かった最初期に宣教の拠点となった長崎県の平戸にある紐差という所です。

私は男5人、女3人の8人兄妹の3男として生まれましたが、現在は男ばかりの4人が健在です。すぐ下の弟はサレジオ会司祭になっています。

当時のわたしの里は多くが農業が主で、わたしの家も自給自足の生活でした。白米にサツマイモを干して作ったカンコロをいれて増量を図ったカンコロごはんが思い出されます。

＊紐差小教区といえば多くの召命が生まれた土地柄ですね。神父様の召命の切掛けなどについてお話を伺いたいと思います。

私も小さいころからミサの侍者を務めていました。何時も教会に親しむ環境の中、侍者たちは、夏は海水浴に助任司祭に連れていってもらっていました。そんな楽しみや主任司祭の温厚で司祭召命に向けた人柄に惹かれたことなども召命の切掛けになったと思います。

小学校を卒業と同時に私を含めて2人が長崎の小神学校へ進みました。

当時同学年で30数名近くが入学し、1学期の終わりに長崎、鹿児島、高松、大阪教区へと振り分けられ、私は高松教区となったわけです。

中学校は長崎南山、高等学校はマリア会が経営していた大阪明星高校に通いました。

高校を卒業して上智大学のスコラ哲学科、神学部へと進み、哲学科は市ヶ谷キャンパスで、神学科は関町の神学院で過ごしました。

その関町で助祭コースを終えて、いよいよ高松教区司祭として25歳で叙階されるのですが、同級の仲間のうち11名が叙階の恩恵に浴しました。

叙階後は一旦、神学院に戻り、私は半年間、川崎の中原小教区で、今でいう司牧実習生を行いました。

わたしの叙階式は桜町司教座聖堂で、田中英吉司教によって執り行われ、その後、先述の半年の実習を終えて、三本松教会に派遣されました。

そして三本松教会を皮切りに、番町、江ノ口と司牧に巡りましたが、再度三本松から番町へと赴任し、今に至っています。

栗林公園の散歩も心の癒し

＊高知の江ノ口教会を新しく献堂された折、聖堂の守護者として福者・田中夫妻を選ばれたとのことですが、どういう経緯があったのでしょうか。

新しい聖堂建立を計画していた時、四国の教会史に造詣が深かったドミニコ会司祭から、土佐出身の田中夫妻殉教者がいると聞き、その詳しい話として、２０５福者殉教者であること、夫妻であることから家庭と夫婦の模範ともなり、また地元土佐出身の殉教者であることが江ノ口教会の守護者とした大きな判断ポイントとなりました。

クが聖堂の守護者でした。

＊今、楽しみになることといえば、どんなことがありますか。

平戸島という海に囲まれた環境で育ったこともあり、釣りがとても好きですが、ここではなかなかチャンスがありません。たまに里に帰った時などは兄貴と小舟を繰り出して一晩の夜釣りにこぎだすのが大きな楽しみです。

もう一つの楽しみといえば、現在番町教会担当ですが、近くにある栗林公園を心行くまでのんびりと散策することが何より心の癒しとなっています。

＊司祭生活の中での良き思い出があれば教えて下さい

そうですね。高知時代に施設の子どもたちとの良き触れ合いがあったことは大きな恵みでした。

小さかった子供たちがその触れ合いの中で成長し、大人となり、母親となり、育っていったその人々との

会再

や、良き交わりと触れ合いを想う時、心から良かったなと、嬉しくなります。また感謝出来るひと時を与えられることがその醍醐味ともいえます。そして「いばらの冠」との関わりもいい経験でした。大変感謝しています。

＊聖書の中の一番気に入ったフレーズをご紹介下さい。

『アッバ・父よ』（マルコ14-36　ロマ8-15　ガラテア4-6）です。

『典礼奉仕』のために（30）

全国典礼担当者会議報告

「典礼における司牧者の役務と信徒の協力」

高松教区典礼委員長　谷口広海

本年も高松教区典礼委員会の担当者として全国典礼担当者会議に出席してまいりました。

夏の暑さが一時的におさまり、軽井沢高原の涼しさの中に、全16教区の典礼担当者が一堂に会し、今年度のテーマである「典礼における司祭の役務と信徒の協力」を日本カトリック典礼委員会委員長である梅村司教の丁寧な解説と委員会秘書の宮越氏の説明によって学んでまいりました。

第2バチカン公会議後、しばらくして「信徒の時代」という言葉をよく聞くようになってから久しく時が過ぎています。

現在、司祭召命と司牧者減少の中にある日本の教会は、「司祭の役務」と「信徒の協力」の在り方を、より真摯に考え、より真剣に取り組むべき喫緊の課題となっていることを、誰もが感じていることでしょう。

また、その時が到来しているのも確かなことでしょう。

これから先の教会典礼や教会活動においては、司牧者には司牧者固有の役務に、信徒には信徒であることの固有の協力と働きを教会憲章や典礼憲章が指し示す方向性や指針の中で、どのように実践していったらいいのか、どう対応していけばよいのかなど、信徒の方々と共に考えていくように促されています。

教会における司祭と信徒の関係のとらえ方は、第2バチカン公会議以前と、その後のそれとの理解の変化を確認しながら、これからの「司祭の役務」と「信徒の協力」がどのような関係性の中で十全に生かされていけるか、全教区典礼担当者が共通理解を深める大切な学びの場を与えられたことは大きな恵みであったと考えています。

社会格差広がるけど笑顔絶えないフィリピンの人々

私は7月21日から27日まで、フィリピンはマカッティという地域を訪問しました。

聖母被昇天修道女会に一泊させて頂き、その後はサレジオ会の修道院と小教区でお世話になりました。シスター方も神父様達も、私を兄弟として温かく迎えて下さりました。

短い期間ながら、関係施設を訪問したり小教区のイベントに参加したりと、毎日様々な出会いと体験を頂き、とっても充実した時間を頂きました。

主日ミサの規模には圧倒されました。朝から晩までミサの予定が組まれ、毎回大聖堂に人が埋め尽くされるのです。

英語のミサでは何度も福音朗読と聖体奉仕をさせて頂き、車や御絵の祝別もさせて頂きました。

またサレジオ会らしく、日曜の午後には地域の子ども達の活動とミサがあり、リーダーの若者達や沢山の子ども達との交わりを頂きました。

フィリピンの訪問2度目でしたが、一層発展している印象を受けました。林立するビル、ハイウェイ、ショッピング・モール、通りを走り抜ける日本製の車、新興住宅地（subdivision）に変わりつつあるサトウキビ畑（sugarcane）など。

一方で、極めて貧しい暮らしを送るスラム街の人々、ストリートチルドレン、新車の間を抜けるボロボロのバイク、お客の来ない露店も見ました。

神父様によると、社会的格差はどんどん広がっており、新興宗教や世俗化の波も来ているとのこと。それでも、私にとって変わらないのは、フィリピンの人々の笑顔と明るさでした。

「苦しい時も、いつも笑って過ごすこと、これがフィリピン人のやり方さ」と神父様はおっしゃっていました。

フィリピンでは助祭のことをReverenceと呼びます。「もうすぐFatherと呼ばれるね」と色んな方に励まされました。

「まだまだ自分は」という私の反応があっても、「大丈夫」という言葉がまた来ます。自分の小ささを思いました。

それと共に、サレジオ会の助祭達や日本人新司祭との交流はとても嬉しいものでした。学びと喜びと信仰の糧を一杯頂いた一週間でした。いつか教区の若者達のプログラムとして訪問出来たらとの希望が湧きます。

高松教区助祭　髙山徹

フィリピンのサレジオ会々員と共に　フィリピンにて

ちょっとひといき

詩　手　（ロザリオ）

だれでも人は
二つの手を持っている
大きな手　小さな手
温かい手　冷たい手
柔らかい手　かたい手
だけど一人の手は
さびしい

誰でも人は2つの手で
なにかしている
家を建てる手
家具を作る手
ピアノを弾く手
料理を作る手
小説を書く手
絵を描く手
だけど一人の手は
さびしい

だから　あなたの手を
ポケットから出して
哀しんでいる人の
肩をたたき
苦しんでいる人の
背中を抱き
疲れている人を支えて
みんなの手と手を
つないだら
ほら
ロザリオになる
世界をとりまくほどの
大きな大きな
ロザリオになる

みんなの手は　愛
みんなの手は　偉大
みんなの手は　叡智
みんなの手は　祈り

教区スケジュール

11月
- 1日（水）諸聖人
- 2日（木）死者の日
- 3日（金）文化の日
- 5日（日）年間第31主日　愛媛地区大会
- 7日（火）司祭評議会10:00
- 12日（日）年間第32主日
- 16日（木）聖書週間（～22日）
- 18日（土）宣教司牧評議会役員会13：00
- 19日（日）年間第33主日「世界貧しい人の日」言葉ではなく行いで愛する。「聖書週間」（～26日）徳島地区教区大会
- 23日（木）勤労感謝の日　今治教会献堂式 9:30分受付
- 26日（日）王であるキリスト
- 30日（木）聖アンデレ使徒

12月
- 3日（日）待降節第1主日　宣教地促進の日　一粒会の集い
- 8日（金）無限罪の聖母マリア
- 9日（土）第4回教区の将来を考える会 13:30
- 10日（日）待降節第2主日
- 17日（日）待降節第3主日　ICCクリスマス会in徳島地区
- 23日（土）天皇誕生日
- 24日（日）待降節第4主日　クリスマス・イブ
- 25日（月）主の降誕
- 27日（水）聖ヨハネ使徒福音記者祝日（諏訪司教霊名の祝日）
- 28日（木）幼子殉職者
- 31日（日）聖家族

教会の問題点はっきり
西讃地区「教区の日」「福音マーケット」で考える

秋晴れの清々しい10月8日、周囲から祭りの太鼓の音や、運動会の応援の声が聞こえる中、西讃地区の信者（坂出、丸亀、善通寺、観音寺、池田）が坂出教会に集まりました。

今年のテーマである「福音マーケット」をＫＪ法によるエクササイズ方式で行い7組のグループに分かれて、夫々が教会での悩みや問題点、また、未来に対する願望等を本音で出し合いました。

日本人グループ５組とペルー人グループ１組、ベトナム人グループ1組で、熱気溢れ、色々な意見が出ました。

各グループでは共通して高齢者問題が多く、「信者以外の人たちも交えて取り組まなければ将来の教会は無くなる。」という諏訪司教の言葉が実感されたと思います。

和気あいあいの雰囲気の中でＫＪ法作業を行う参加者

午後から、グループ毎に発表があり、坂出教会を中心に参加しているベトナム人グループの青年達からも、皆さんの暖かい対応に感謝しつつも、言葉による弊害から誤解を招く様な事がしばしば起こるとの悩みや、ペルー人グループからも同じような問題点の訴えもありました。

発表会の後、諏訪司教様の司式で御ミサが執り行われ、各教会から参加した外国籍の信者の母国語での福音書の朗読や、ベトナム語の答唱詩編も新鮮味があって良かった。最後に司教様の派遣の祝福を受け、皆は大きな夢と希望に胸を膨らませながら帰途に就いた。

丸亀教会　太田　修

信徒も入門講座を担当
自分たちのやり方で信徒増

道後教会の福音宣教

信徒たちが『自分らしいやり方を見つけ』福音宣教に取り組み、信徒増にもつながっている道後教会のケースを10月1日付けのカトリック新聞が掲載している。

高齢化、信徒減、社会の教会離れなど深刻な状況の中で、道後教会は現在の状況を分析し、その結果を宣教活動に反映させて良い結果を生んでいるところに特徴があると同紙は紹介している。

道後教会では担当司祭が入門講座を開き5人ほどが学んでいたが、司祭の移動で講座が続けられなくなった。これを機に2013年から同教会の宣教委員会で『なんとか信徒ができる範囲のことをしよう。自分の信仰を伝えることだったら出来るのでは』というかたちで入門講座にかかわることになった。

信徒によるキリスト教入門講座風景

講座の仕上げは担当司祭が秘跡、原罪、三位一体など神学的な奥深い説明を担当。

それまで同教会は臨終洗礼のほかは成人の受洗者がほとんどない年が続いていたが、宣教委員会で講座担当を始めてからの受洗者は13年1人、14年4人、15年7人、16年2人、17年2人と年平均3人となっている。

同委員会の城和雄委員長は『自分たちの教会らしいかたちを見つけられたことが良かったのではないか』と語る。

現在は司祭1人を含む委員7人で5人の求道者に対応している。

委員は高齢者も多く、外へ出て行く宣教は難しい。もっぱら主日のミサに初めて参加した人々に話しかけ、御ことばの講座へ誘うことに力を入れる。

教会のアンケートでも受洗のきっかけが『教会を訪れたこと』が全体の15％と3番目に多いからだ。

城委員長は『現在の教会の課題は多いが、大切なのは教会の現実を知り、自分たちのできることを見つけてまずやってみることだ』と話す。道後教会の福音宣教への模索はこれからも続く。

合唱や朗読劇
石原孫右衛門と息子の殉教４００年祭

イエズス会の記録により、讃岐で殉教したことが伝えられているアントニオ石原孫右衛門と息子のフランシスコ。殉教した年は1617年で今年は400年に当たります。

桜町教会では、今年いくつかの記念行事を行いましたが、その仕上げとして、10月1日に殉教400年祭を行いました。

殉教400年祭は、顕彰式、記念ミサ、記念パーティーの3部構成で行われました。聖堂前に集合しての顕彰式は「讃岐の殉教者アントニオ石原孫右衛門父子の列福を求める祈り」（2009年司教認可），2人をたたえる歌「アントニオとフランシスコ」（桜町教会作詞作曲）合唱で始まりました。

続いて朗読劇「讃岐の殉教者アントニオ石原孫右衛門とフランシスコ」を上演してお捧げしました。

この朗読劇はイエズス会に残る記録をもとに2人の殉教の様子を分かりやすく伝えるものです。

また，桜町教会では，2007年に2人の石像を建立しており，御像に花の首飾りなどを飾り顕彰式を終えました。

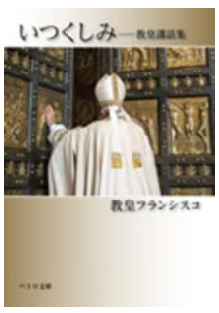
その後，2人と私たちとの深い交わり，桜町教会をいつも導いてくださいますようにとの願いを込めて感謝の祭儀が行われました。

ミサ後は，四国カトリック会館に場所を移し，フルーツパーティーで400年をお祝いしました。たくさんフルーツをいただき，三宅製麺の手打ちうどんも振る舞われ，おなかいっぱいで殉教祭を締めくくりました。

孫右衛門父子についての情報は，桜町教会ホームページに掲載しています。是非ご覧下さい。

※三宅製麺＝三宅評議会議長の副業
（写真は顕彰式にて花の首飾りをかけているところ）

新刊書籍紹介



■**いつくしみ**―教皇講話（Catechesis on mercy ）

いつくしみの特別聖年中に行われた一般謁見連続講話。聖年の意味の解説から始まり、旧約聖書における御父のわざを考察し、いつくしみに満ちたイエスの姿を福音書に見る。そして「ゆるすこと」と「与えること」といういつくしみの2本の柱を示し、慈善のわざの実践を促す。

著者教皇フランシスコ　発行日2017/10/25
ページ数224 P　本体価格 800円（税込864円）

人生の秋という恵み―成熟と実り、そして日々新たに生きる姿の美しさを教えられる時。さまざまな課題に向き合い、変化を経験しながら人生の旅路を歩む私たち。日々の暮らしの中で福音に聴き、福音によって生かされ、ともに生きることを、いのちそのものである神とその知恵に心を上げつつ見つめていく。

人は生涯を通してさまざまな課題に向き合い、変化を経験しながら人生の旅路を歩んでいく。日々の暮らしの中で福音に聴き、福音によって生かされ、ともに生きるということを、いのちそのものである神とその知恵に心を上げつつ考えたい。

（本文より）　武田なほみ　著　B6判　並製　224ページ
販売価 1,620円（税込）　オリエンス宗教研究所

八幡浜教会は、2017年6月1日に小教区創立80周年、同9月25日に献堂67年を迎えます。これまでの宣教の恵みを感謝する機会とし、教区長およびドミニコ会管区長をお迎えして、記念ミサを開催いたします。

ここにいただいた恵みに感謝を表し、信者の一層の霊性を深める機会にしたいと思います。

各小教区、関係の皆様におかれましては、是非お越しいただき、感謝の分かち合いを共にしていただければ幸いです。

期日　平成29年11月26日（土）
受付　12時　ミサ　13時～
祝賀会　15時～
会場　カトリック八幡浜教会（八幡浜市昭和通1182-7）
〆切　平成29年11月8日（ハガキ必着）
問い合わせ先　西園寺　良徳（090-7141-4215）

TSC高松教区サポートセンター
東日本大震災大船渡支援
献金入金報告（含お米券）
（8月25日～10月25日分として）
6万7231円
累計（6月20日現在）
1千716万8623円

編集後記

高松教区の「福音マーケット」の取り組みは緒に付いたばかりですが、そこから福音宣教のヒントが溢れ出してくることを期待している信徒も多いのではないでしょうか。

また道後教会の信徒による積極的な宣教姿勢を目にした人からの熱いエールも高松教区民にとって大きな励ましになります。

四国の教会の現状を見ても、教皇フランシスコの「キリスト者は諦めない」との励ましの中で、これから先の「福音マーケット」を自らに一体化できるかが問われているのでしょう。（J）

聖ドミニコ宣教修道女会

私たちは、自分を創造しようとするこどもをまなび、護りましょう
暁の星学園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園